

[研究大会報告]

第16回(2007年度)JAMS研究大会報告 その2
—第1セッション雑感：
地域研究と専門研究の間のフロンティアを求めて—

伊賀 司(神戸大学大学院)

第16回日本マレーシア研究会大会は、2007年12月1日と2日の2日間にわたって行われ、各報告に基づいた活発な議論が行われた。1日目の要旨については、左右田会員がまとめられているので、以下の短文では筆者が参加した第1日目の第1セッションについて、筆者の個人的な興味関心に基づいた雑感を記すことをお許しいただきたい。

今回、第1セッションで、独立50周年目のマレーシアを記念して共通論題でマレーシアの半世紀を振り返り、将来の展望に示唆をえることができるような研究報告を聞いたことは筆者にとって非常に有益な体験であった。Omar Farouk 会員(広島市立大学)と吉村真子会員(法政大学)によって、歴史的な視点と時に個人的な体験も交えながらこれまでマレーシアが辿ってきた半世紀の軌跡について、ポイントを的確に押さえた報告がなされた。Omar 会員と吉村会員の報告で、マレーシアが辿ってきた道のりと今後の展望についても大きな見取り図が示されたことは、筆者にとって自分の限られた関心・研究分野を大きな文脈の中に置いてみて再構成していくうえで、非常に有益な示唆を得たと思う。

全報告が終了した後の加藤剛会員(龍谷大学)のコメントではデータを示しながら都市化が進むマレーシアの現実が示されるとともに、そこから付随して起こりつつあるさらに新たな状況について説明があった。加藤会員のコメントにより、今後マレーシア研究で重要な課題となりそうな分野や、新たな発見の種になりそうなヒントを得たと筆者は考えている。

ただ、第1セッションで最もインパクトのあった報告は、中村正志会員(アジア経済研究所)の第2報告であった。中村会員の報告は政治学において、相対的に研究の蓄積が豊富であるとともに、科学としての政治学の確立に最大の貢献している選挙研究¹を報告の中心に据えた点で、地域研究者の参加者が多かった本セッションでは異色の報告であった。大学院で政治学のコースに在籍していても、どちらかという地域研究的色彩の強い研究をしている筆者にとり、中村会員の研究は非常に刺激的であった。しかし一方で、地域研究的な手法で研究されている会員が多くみられたフロアーとの間で、前提となる研究対象にどのように取組むかのアプローチの仕方の違いもあり、セッションの限られた短い時間内で十分な議論がつくされなかったようにも思えた。

ただ、地域研究と政治学(或いは現代政治研究)との間で、対象に対するアプローチの仕方や目指す目標が異なるゆえにしばしば混乱が起こることは既に一部の研究者の間ではよく知られている現象である。例えば、韓国政治研究者の大西裕は、対象国・対象地域に

¹ こうした政治学の中での選挙研究の位置づけや、最新の動向などは、スティーブン・R・リード『比較政治学』ミネルヴァ書房、2006年、を参照。

ついでに理解や本質を悟るうえでの「了解モデル」を構築しようとする地域研究と、現代政治についての仮説を生み出し、その検証のための含意を提供する「ブラックボックス・モデル」を構築しようとする政治学との間に一定の緊張関係があることを指摘している²。この指摘は、政治学に限らず、一定のディシプリンに基づいて研究を行おうとする多くの専門研究と地域研究との間でも起こりうる関係であろう。

しかし、大西も指摘しているように³、こうした緊張関係が交錯する場所こそが、それぞれの分野でまだ手付かずのフロンティアであり、先駆的な研究を生み出す土壌にもなることも筆者は考える。

第1セッションでは、そうしたフロンティアの発見と開拓を進めていくためにも、異なるディシプリンを背景にした研究者同士が対話を続けていく場として、マレーシア研究会の重要性を筆者自身は再認識させられることになった。

² 大西裕「地域研究と現代政治分析の間」『レヴァイアサン』第40号、2007年、73-74頁。

³ 大西、前掲、78頁。